

正宗白鳥

リー兄さん





リー兄さん



「リー兄さん死す」との電報に接した時には、真木村家の長男で相続者になっている鉄造は、月並のあわれを感じずるとともに、軽い安心を覚えた。リー兄さんと云つても、真木村家十人きょうだいのうち四男に当るのだが、この男一人が妻子もなく定職もなく、孤独貧窶ひんるの生活を続けて来たので、東京で戦災に罹った後は、瀬戸内海のほとりの故郷の生家へ帰って、兎に角其処で生きていたのであった。生れた家だから、先祖から伝わったぼろ家

へ、自分も住居権がある如く入り込んだのだが、生活は誰の世話にもならぬと、沈黙のうちに覚悟していたらしく、兄弟の誰にも、生活費の援助を頼んだことはなく、兄弟の方で彼の窮状を察して、時々多少の金銭を恵んでやっても、決して感謝の手紙を出したことはなく、着いたか着かぬか分らぬから知らして呉れと云ってやっても、返事がないのであった。でも、金を返して来ないのだから、自分で使っているのだと、兄弟間の笑い話になつていた。

両親に似て、自分自分の生活を大事にする常識家揃い

のきょうだいのうちで、彼だけは異様な存在であった。彼のギブンネームは、林蔵であった。この真木村林蔵は、弟や妹に向つては、自分で自分をリー兄さんと云つて、兄たる権威を示していたらしかつたが、それが習いとなり、彼の愛称のようになって、兄でも誰でも彼をリー兄さんと呼んでいた。父親は或日、きょうだい中での出世頭の長男の鉄造に向つて、「お前はリーに似ている。でも、お前はちゃんとして世を渡っているんじゃないからそれでいい訳じゃ」と、真面目に云つた事があつた。子を見る事親に如かずと云われているが、鉄造は意外な父親の

批判を受入れて、自分とリー兄さんとの類似を検討したことがあった。検討したってよく分らないが、ただ運次第で、彼の生涯が我の如くであり、我の生涯が彼の如くであったのか知れない、と思ったりしていた。

兎に角、鉄造は、避暑のため山へ行こうとした企てを中止して、故郷へ行って死者を弔うことにした。かねてリー兄さんの末路の処置は、鉄造の身に振りかかって来るのではないかと、気づかっていたので、これが急速に簡単に解決されたのは、彼我のために却って幸福であったのだ。



故郷の家には、鉄造の表札が長い間の風雨にさらされて、薄汚く、ぼんやり姓名を現わしているのが、彼が帰郷するたびにいつも目につくように今度も目についた。東京の家には、彼の相続者たるべき青年の名の記された真新しい表札が掛けられている。軽井沢の別宅には、彼の表札はなくって、管理者の名前が大きく打立てられている。先祖伝来の故郷のぼろ家にだけ、老後の彼を表象しているような表札がかかっているのである。家の中へ踏込むと、この前の帰郷に見たよりも、清らかで、いくらか明るい感じがした。奥の間に女の寝息がしていたが、

これは、真木村家の血族の一人としての、ここの管理人の主婦で、数十年来ここを自分の家として、数人の子女を育てたのである。同居者のリー兄さんの最後は、この夫妻だけで見届けて、跡仕末をしてやったので、彼女は疲労しているのであるろうと、鉄造は推察して、眠れる彼女に声を掛けないで、静かにあちらこちらを見廻っていたが、座敷の片隅から、ラジオが株式放送をしているのが、あたりと不調和で異様に感ぜられたのであった。

便所に近い一室には、故人の霊が型通りに祭られていた。一生写真を撮らなかつたらしい故人の写真は掲げら

れていなかっただが、筆<sup>ひつこん</sup>跟<sup>こん</sup>新たな物々しい居士<sup>こじ</sup>名<sup>な</sup>を記され、  
た位碑が据えられて、くだものや菓子などが供えられ、  
誰かの俳句や和歌らしいものの貼りつけられている小屏  
風が逆さに置かれてあった。煎香の煙も漂っていた。そ  
れに、朽ちて崩れていた筈の、この部屋が小ざっぱりし  
た上敷で蔽われていた。行倒れ同様の死様をするのでは  
ないかと、かねて、長兄などに空想されていた林蔵も、  
こうした世間並の葬儀に恵まれているらしいのを、鉄造  
は不思議に思い、そして、その位碑の前にちよつと額<sup>ぬか</sup>ず  
いて、木魚で鐺<sup>かね</sup>を叩いて、煎香にも火をつけた。

こうして、死者に対して、鉄造が柄にない月並の行為をすると、林蔵の霊も、月並の挙動をするのであろうか。魂髻こんぼうぶつとして、一生涯のおのが姿を現わしたのである。

わしは頭の先から足の端まで真っ黒のようだ。兄弟のうちでも際立って黒いのだ。白々しろじろとした妹なんかもあるなかに、わしばっかりが真っ黒なのは不思議なようだが、それがそうだから仕方がない。黒くって汚ない。海の漁夫などは汐に焼けて黒いのだが、わしのは木地きじの黒さだ。わしはわしがそんな人間だと、子供の時分から次第に考

えるようになった。わしが女との縁を切るようになったのもそのせいだ。わしは徹底的に女嫌いになることに努力した。そして、それだけには成功した。兄弟はみな人並の結婚をして、男の子や女の子を生落しているが、わしだけは、そんな真似はしなかった。いや、わしも結婚の真似はした。真似の真似はした。親爺が親の義務として、押付けたので、押付けられるままに、黙って三々九度の儀式をすました。それで、新婚夫婦は、古風に造られている離れ家で新生活をはじめた訳だが、わしには、わしとは何の縁もない一人の女性が側にいて、

極りの悪そうな顔しているのを興もなく目に触れているに過ぎなかった。わしの顔はさぞ黒々と彼女の目に映つたであろうが、彼女の顔は白かった。なんにも話はしなくって、わしが不断とちがった柔かい蒲団を被って眠ると、彼女もいつか寢床に就いたらしかった。新家庭の筈であったが、食事は本宅でみんなと一しよに採ることになっていたので、夜が明けると、女中の知らせで、一族団だんらんの席に就いた。彼女の膳が一つ、適當の位置に置かれていたのだ。彼女がわしのお給仕をするのではなかった。

食事が終ると、わしは、極まった時刻に当時奉職してい

た隣村の小学校へ出掛けるのであったが、新婚者として村の者に見られるのを嫌って、裏の山道を通った。不断でもわざとこの山道を通る日が多かった。勤めを終わって帰ってから、離れへは行かないで、今まで通り、本宅の二階の一隅へ入って、黙々の孤独の時を過した。そして、夜おそく、不承不承に離れへ行つて、そこにちゃんど敷かれています夜具のなかへ入った。花嫁は一日中、わし以外の家の者と仲よさそうに話をしていたし、女中や近所の人にも親しそうに口を利いていた。両親も、新夫婦の間について何の疑惑も抱いていないらしかった。そ

ういう変<sup>へん</sup>挺<sup>てい</sup>な有様で日また日が続いた。

処女と云う者はこういう者かと、わしは奇異な感じがしだしたが、或る夜わしは「わしには子供を生む力は無いのじゃ」と、思わず口に出した。この奇異な言葉に、彼女は驚いたようだが、その驚きも直ぐに消えて、しおしおした顔に一<sup>ひとしずく</sup>雫の涙がこぼれた。わしでも、その時一生に一度の、女性に対するあわれを感じたのだ。そして、その翌日、父の前へ出て、咄<sup>とつとつ</sup>々たる口調で離別を強要した。「なぜ初めに断らなかつた」「それはその通りだ。わしだってそう思っている」



腑甲斐なくも、結婚の真似でもしたくって断らなかつたのか。

鉄造は、淡い煎香の煙のほとりに漂っている林蔵の死後の述懐を聞いているような気持になり掛けていると、さつきから隣室で深い寝息を洩らしていた主婦が、ふと目を醒まして来訪者を一瞥すると、あわただしく起上ったので、まぼろしの声の止切れた思いをした。

「今度は御苦勞だったね」と云うと、

「一時途方に暮れたのですけれど、どうにか片付きました

た。何年もお風呂に入らないで、垢だらけになってる身体を、わたし一人で奇麗に洗って、こんな場合の用意に調べていた浴衣を着せて上げました。一昨日おととい亡くなつて昨日きのう火葬にして、お骨もしっかりと壺に収めました、こちらの村でも隣村共同の火葬場が出来たのが、リー兄さんのためにも幸福でした。今までのように土葬だったらどうします？ この暑さに穴を掘るのは大変なことじやありませんか。それが町役場へ電話で依頼したただけで、大勢で引取りに来て呉れて、錦きんらんの蔽いをしてお棺に入れて火葬場へ運んで呉れるんです。骨揚げまで一切の

費用が極められて、余分のお金は入らないことになって  
います」

「それは便利になったね。こんな暑い時分に死骸を埋める穴を掘らされるのはたまらないだろう。誰がやって呉れるだろう」

その夜は、鉄造と此処の夫婦と三人は、宵のうちをリー兄さんの追憶話で過した。ここの管理人夫婦とリー兄さんとは、終戦後十余年間も、お互いに好ましからぬ同居を続けたので、口喧嘩もよくしていたが、それだけに、

リー兄さんに関する話の種は、彼等夫婦が最も多く所有していた。入江を見下して眺めはよくつても、障子は棧だけが残っていて、畳は破れたり凹くぼんだりして正体のないほどに朽ちているだだっ広い二階は、この孤独の住者に独占されていたのだが、その住者は殆んど掃除はせず、十余年の間入俗をしないような不潔生活で、おびただ夥しく蚤が発生するほどで、爽かな海風もこの二階の広間を通つて階下へ流れ落ちると、異様な臭気を放つそうであつた。それで、階下に住む管理者の家族は、十数年間絶えず警告していたのだが、リー兄さんには他人の警告などは馬

耳東風なのだ。

この不潔の塊まりであつた彼も戦災に罹るまでの数十年間は、東京生活をしていたので、東京に住んでいた間は、兎に角人間らしい身装をしていたのだ。東京では概して美術修業をしていた。戦災の打撃を受けたためか、不潔の塊になつた彼が、美の表現を志していたのは不思議である。青年時代、田舎の小学校の教師をしていた彼は、俸給のすべてを貯蓄していた。酒は飲まず煙草は吸わず、何等の無駄費いはせず、衣食は一切父母の負担に任かせていたのだから、可成りの貯蓄は出来たので、そ

れを資本として東京行を決行した。それで学校へ辞職届を出した。そこの校長は林蔵の父親に会った時に、「林蔵さんは東京へ修業にお出掛けになるそうで」と、祝意を述べると、父親は、当人からは何も聴いていなかった。ので、びっくりした。それで、早速当人に訊きたただしたが、当人は、むにやむにやと口の内で答えただけで、父親が重ねて詰問しても、いかなる方針で出掛けるかはつきりした返事はしなかった。「リー兄さんが東京へ行くんじゃない」と、弟妹は、事の意外を面白がって囃し立てた。長男の上京の時には、長男は、祖母に向って、「わ

しは東京の学校へ行こう」と、ねだって、祖母から父親に報告させただけで、事は順調に運んだのであった。林蔵の上京については、父親はにがり切った顔していたが、学資無用との事でもあったので、つまりは当人まかせで放任した。

管理者の主婦はその話に連れて、「昨日近所の八十を過ぎたおそよというお婆さんが、お二階の旦那様がお亡くなりになったそうで、おいたわしい事いたしましたと、くやみを云いに来ました。多分昔リー叔父さんの子守として此処に雇われていたので、なつかしかったのでしょ

う。その時の昔話に、あの方は、お小さい時、祖母さんにも粗末にされていたようでした。(リーよ御飯お上り)とお呼びになっても、外のぼっちゃん、嬢さんには焚き立ての温い御飯をついで上げなさつとるのに、リーぼっちゃんにだけは、残りの冷飯を上げになさるんです。わたしは、お可愛そうな気がしたのを、今も覚えて居りますと話していました」と話した。

「そう云えば、リーが何かで祖母さんに怒られて、お灸を据えられたのを、僕は覚えて居る。外の子供はそんなことはなかった」と、鉄造は云って、「祖母はどの孫に



対しても分け隔てはなかった筈だが、リーだけは、何となく安っぽく見られたのか。家には大勢子供があつたのだが、リーは、便所の側のこの部屋に寝かされていた。

二階のあの部屋は上等部屋で、僕の寝室にしていたのだ」  
「リー叔父さんはからだだが悪くなって、二階からの便所通いは不自由だから、私がこの新しい上敷をここに敷いて、二階から下りて来て、此処に寝るように勧めたのですけど、片意地を張って、どうしても下りて来ないのです。そうしてるうちに、腹はら匍ばいになって、二階から下りて来る途中で、大しくじりで、汚いものが垂れ通しにな

ったのです。その跡仕末が大変で」と、主婦はその時を想像しながら眉をしかめた。

「リーも片意地を通しながら、つまりは人のお世話になつたんだね」

「でも、リー叔父さんは、死ぬる覚悟はしていました。強いてお医者者に診て貰うことにしたのですが、お医者さんが、あなたは何処も悪くはないんだから、元気をお出しなさいと力をつけても、自分はもう駄目だと云って覚悟していました。それからわたし達が気がつかなかった事でしたが、最後に便所へ通う前に、側の紙切れに遺言

状を書いたのです。絵を書く筆で」

「リーの遺言状とは不思議だね。誰に当てて、何を書いたの？」

「わたしに当てて。いろいろお世話になりましたと」

「リーがそんな事を云うのは意外だ。死ぬる時にはそんな気になるものかなあ」

「それから、自分は以前から肺病なので、人にうつしちや悪いから、それで二階から下に降りぬようにしたのだとも書いてありました。肺病なんかじゃないんですよ。独り極めにそう極めて、不断高い薬を買って飲んでいた

らしいんです。お医者さんに訊くと、それは見当ちがいの薬なのに」

「その高い薬代はどこから取るんだね。絵が多少売れるんだろうか」

「御当人は自分は大変えらい画家だと思ってるらしいんで、安っぽく売ろうとはしなかつたんです。売ろうと思えば随分買い手があります。村の工場は近年は大変な繁盛で、他所よそから働きに来とる人で村に居すわって、新たに家を建築する人も続々あるんです。それで、家の飾りに絵を欲しがる人もあるんだから、リー叔父さんの絵だ

って売り物になります。わたし達もたびたびお世話しよ  
うと云うこともあったんですけど、御当人は権式ぶって  
売らないんです。それが、今日のたべものにも困った時  
には、威張ってばかりはいられないで、誰かの世話で安  
っぽく売ったりしていたようでした」

「リーの絵は金になるような絵なのか。東京では誰に絵  
を習ったんだろう」

「誰にも習わないで、勝手に書いてたんじやないかな」  
この住宅管理者のHは、美術書や文学書の雑書は、多  
年暇にまかせて読んでいるので、ゴッホとかゴーガンと

かの西洋の美術大家の名を挙げて、リーの絵を批評したりした。こういうところは田舎はのどかである。

「どんな絵か見て見ようか」

鉄造はしみじみ見たことのない林蔵の絵を彼の死後に改めて見ようとした。

主婦は需もとめに応じて、三四点の、書きっ放しの絵画を、二階から持って来た。それ等を、手頃な高さの用筆筒の上上に陳列して、二人は目を注いだ。静寂な空気のなかに、二三匹の蚊が微かな音を立てた。

三人とも、美術の鑑賞力はないのである。鉄造の如きは、古今東西の名絵画を、模写や写真版ではなく、正銘の本物で観ているのだが、それ等の作品の真価に徹しては何も知らないと云うほどに、鑑賞力を欠いているのである。ただ美術品とは美しいもの、絵画は奇麗なもの、世間並みに思っていたのであったが、今日に映るリー兄さんの絵は美しくもなければ、奇麗でもなかった。晴れ晴れしいところはなくって、陰気な絵である。海も山も樹木も人も、むしろ汚らしい。

不潔のかたまりのような彼の書いた絵は、このあたり

の風光明媚な海辺や丘陵を思い切り醜化したようなものであると、鉄造は感じた。

「しかし、素人はこんな風に汚く書くことも出来まいね。不潔に徹した人間の書いた絵らしく、汚さに徹して  
るのかも知れないね」

「右の方の木の枝は肩を怒らせているようにイカついが、左の方の木の枝は、何の木だかほうき箒のような形で垂れ下って居る。何処を書いたのかな」

Hは首をひねった。

「何の草花だが分らないけど、草花のなかに、女のいる



絵は、珍らしいんです」と、主婦は云って、「この女が目の下に涙見たいなものを垂らしてるでしょう。涙にしちや、その一雫の涙が黒いのは可笑おかしい」

「リー兄さんは女のモデルなんか使わないだろうから、空想なんだね。あいつが空想で女を書くなんか可笑しい」  
鉄造はそう云って微笑したが、ふと心に浮ぶものがあった。

兎に角、この自称画家は絵は下手だと、衆論一致した。こんなものを、新築家屋の壁に掛けたって、部屋にふさわしい色取りにはなるまいと思われたが、これは三人の

鑑賞力の乏しいためかも知れない。

「銭がなくなつたと、リー叔父さん独言のように云い続けていたのに、或朝、魚市場へ捕り立ての魚買いに行つたのです。絵が売れたためなんでしょう。そしてピンピン跳ねてるボラを買って来て、刺身にして、コリコリした肉をうまそうにたべていました。あくる日、わたしが市場へ行つて、売れ残りのボラを買おうとすると、これは、昨日の約束で先生のに取って置くと云つて、外の人には売らないでいるんです。そこへリー叔父さんが買いに来ると、わたし達に売る時とは半値ぐらいで売るんで

すよ。この漁夫は昔小学校でリー叔父さんに教わった生徒だそうです。昔の先生が落ちぶれたくらししてるのがお気の毒だと云うんでしよう」

個人展覧会の合評が終って、鉄造は旅の疲れもあるし、早目に寢床に就いたが、父親が昔彼に向って、「お前は林蔵に似ている」と云ったことをふと思出した。それから、自分が画家になっていたら、林蔵の絵のような絵を書いていたのじやないかと思ったりした。林蔵の絵だつて、ここに傑すぐれた批評家か鑑賞家か或は愚かな批評家か鑑賞家が出て来て、これは独特の妙味ある絵画であると

激賞したら、ゴーガンかゴツホか鉄斎かの如く持もては囉やされるかも知れない。

「阿呆云いなさんな」鉄造のその夜の夢のなかに、リー  
兄さんの声が聞こえた。

(昭和三十六年十月)





日本文学電子図書館

---

リー兄さん

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系16 正宗白鳥集  
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館